

Y15b 多角的アプローチが進む天文教育・普及 - 日本天文学会の役割についての再考 -

縣秀彦(国立天文台)、黒田武彦(西はりま天文台)、宮田隆志(東大天文センター)、富田晃彦(和歌山大)、綾仁一哉(美星天文台)、尾久土正己(和歌山大)、鈴木文二(三郷工業技術高)、古莊玲子(早大)、松本直記(慶應高)

天文月報 2004年2月号と3月号の特集記事「多角的アプローチが進む天文教育・普及」では、専門家が参加する学習共同体が、生涯学習・学校教育を問わず重要な役割を担っていることを示した。この特集記事で扱った幾つかの事例の他にも、教育関係者と専門家が共同で生徒や市民を支援する共同体作りが、地域、全国、国際のそれぞれの規模で進んでいる。このような共同体では学術研究に関する共同体への教師・学芸員の参加と、学校教育または生涯学習に関する共同体への専門家の参加が同時に成立し、教育・普及を実践する新しい共同体が形成されている。天文教育の枠を超えて広く教育全般でも、多様な学びの共同体が形成され、さまざまな真正資源が有効に活用されていくことであろう。日本天文学会も天文学の普及をさらに進めるため、より積極的に教育・普及に関与していくことが期待される。具体的には、(1) 天文教育論文の発表の場の新設、(2) 講師派遣制度の充実、(3) 学習指導要領改訂への関与等を検討すべきであろう。

本講演では、天文教育に関する年会講演の数と質の推移や、その講演が最終的にはどのジャーナルに投稿され論文化されているかの調査に基づき、主に天文教育論文の今後の扱いについて考察・提案する。